

# 英米文化の背景

## 「英米人の迷信・俗信」考 (8) III 恋と結婚

### —その3 花嫁衣装・花嫁花婿の心得・結婚式・花嫁の涙・結婚指輪

藤高 邦宏

倉敷芸術科学大学教養学部

(1999年9月30日 受理)

#### はじめに

人生の大きな節目である結婚の日に備えて、未来の花嫁花婿とその関係者はそれぞれ挙式準備をする。特に花嫁側にとっては、当人と身内は花嫁衣装の準備に気をとられがちであろう。古くから花嫁衣装には4つの条件——「古いもの、新しいもの、借りたもの、青いもの」を身に着けること<sup>1)</sup>——があるので、それを満たすべく準備することになる。また、今でも一部守られていると言われる習慣——例えば「花嫁はウェディング・ドレスを自分で縫ってはいけない」<sup>2)</sup>とか「ウェディング・ドレスは一針縫い残しておき、挙式のため教会に向かう直前に完成すべき」<sup>3)</sup>など——がある。そしてついに挙式日がやって来たとき、花嫁花婿には挙式にあたっての古くからの諸々の心得がある。例えば、「式当日には、祭壇の前で花嫁の父親から花嫁を引き渡されるまでは、決して花嫁の姿を見てはならない」<sup>4)</sup>との花婿の心得がある。

こうした習慣、俗信の起源、根拠は一体どのようなことなのであろうか。今号では「挙式準備に始まり、花嫁花婿の心得、教会と挙式、式参列者、花嫁の引き渡し、花嫁の涙、さらに結婚指輪」等の項目を取り上げ、その文芸用例をも挙げながら考察を試みたい。

#### 1 花嫁衣装

Tad Tulejaによると、かつて中世の頃には「嫁入り箱」(hope chest)と呼ばれるものがあって、女の子が生まれると父親が木製の箱を作り、その娘が大きくなるにつれて一品ずつ中身が詰め込まれたという。特にその中身の嫁入り衣装のことを、一般に「嫁入り支度」(trousseau)と呼んだようである。また、その中身は娘自身の針仕事による衣類の他に、銀器、磁器のような所帯道具も入れられており、それは一種の結婚持参金であり花嫁の財産でもあった<sup>5)</sup>。現代でも、嫁入り支度についてのその「心」は同じかもしれない。

ここでは嫁入り支度の中でも、特に花嫁が結婚式で着用するドレスその他の衣装について、古来の習慣と迷信、俗信について考察する。

☆「花嫁衣装には、4つの条件がある。花嫁は『古いもの、新しいもの、借りたもの、青

いもの』を身につけなければならない。」ウェディング・ドレス、その他ヴェール、手袋、靴下、ガーター、靴、いずれのものでもよいが、それらがこの4つの条件を満たしていることが求められる。これについては、「古いもの」は過去を表し、「新しいもの」は未来、「借りたもの」は現在、そして「青いもの」は貞節を表すとされ、結婚という人生の新たな門出をする花嫁の心の姿勢が映し出されている、と言えるであろう。なお、「青色」は古くから「貞節」を象徴するとされる<sup>6)</sup>。「青色」と「貞節」の結びつきについては、Geoffrey Chaucer, *The Squires Tale* (*The Canterbury Tales*, 1390) の次の箇所が参考にされるであろう。

And by hir beddes heed she made a mewwe, / And covered it with veluëttes blewe, / In signe of trouthe that is in wommen sene.<sup>7)</sup>

(そして彼女は寝床の枕もとに鳥籠を作った。／そしてそれを青いビロードで覆った。／女性に見られる誠実のしるしとして。)

#### (1) ウェディング・ドレス

花嫁衣装のうちその主体となるのは、やはりウェディング・ドレスであろう。

☆「ウェディング・ドレスの色は、白が最も適切な色である」とされる。本来、白は「無垢と純潔の象徴」<sup>8)</sup>とされ、結婚してこれから現実生活に入っていく女性の立場を象徴するものだと言われてきた。これについての用例が、Oliver Goldsmith, *The Good Natur'd Man* (1768) の次の箇所に見出される。

...I wish you could take the white and silver to be married in. It's the worst luck in the world, in any thing but white....<sup>9)</sup>

(…結婚式には、白と銀の衣装を着てくれたらよいのと思う。白以外のどんなものを着ても、全くもってこの上なく不吉です。…)

ウェディング・ドレスの色は、このように白色が適切とされ、それ以外の色は縁起が悪いとされるようであるが、ウオーリックシア州（イングランド中部）に伝えられる古い俚謡によると、白以外ではピンクとブルーならば差し支えないものとされるようである。

Marry in white, you have chosen right / Marry in green, ashamed to be seen / Marry in grey, you'll go far away / Marry in brown, never live in a town / Marry in blue, love ever true / Marry in red, wish yourself dead / Marry in yellow, ashamed of your fellow / Marry in black, wish yourself back / Marry in pink, of you he'll aye think / [or more ominously, Your fortunes will sink].<sup>10)</sup>

(白いドレスで結婚したら、あなたの選択は正しかった。／緑のドレスで結婚したら、人目をはばかりになり、／灰色のドレスで結婚したら、遠くへ旅立つであろう。／褐色のドレスで結婚したら、一生町には住めない。／青いドレスで結婚したら、変わらぬ愛情を持ち続けるが、／赤いドレスで結婚したら、命を絶ちたいと願ひ、／黄色のドレスで結婚したら、夫のことを恥ずかしく思うようになり、／黒いドレスで結婚したら、別れて一人になりたがり、／ピンクのドレスで結婚したら、絶えず夫に思いやられる。／[あるいは、悪くすれば、身代をつぶしてしまうであろう。]

その他、ウェディング・ドレスについては、次のようなことも伝えられる。

☆「ドレスの素材は絹が最も好ましい。サテンは不運をもたらし、ベルベットは未来の貧困を予兆する」と言われる。

☆「ドレスには模様があつてはならない」とされる。特に、鳥とつる草の絵は避けるべきと言われる。

☆「花嫁は、自分の着るウェディング・ドレスを縫うものではない」とされる。現代では自分のウェディング・ドレスを自分で縫う花嫁は結構いると言われるが、かつてはそれをすれば不運を招くことになるので慎むべきとされた。

☆「ウェディング・ドレスの一部は未完成にしておくべきである。」花嫁の幸運を願うという理由で、挙式日に花嫁が着用する直前まで、さらには、花嫁がそれを着用後家を出る最後の瞬間まで、ドレスの最後の一針を縫い残しておくのがよいとされる。

☆「ウェディング・ドレスに髪の毛を1～2本縫い込んでおくと幸運に恵まれる」<sup>11)</sup>と言われる。

☆「ウェディング・ドレスを血で汚してはならない。」ただし、お針子が針を折ってしまい、その災いを避けるためにしみをつける場合は例外とされる。万一ドレスを血で汚すようなことがあれば、彼女自身の命が永くないことを示す前兆だとされる。

☆「ろうそくの光でウェディング・ドレスを点検してはならない」<sup>12)</sup>とも言われる。

## (2) ヴェール、ブーケ、その他

次にウェディング・ドレス以外のもの——ヴェール、手袋、ストッキング、ガーター、靴、そしてブーケ等——に関しては、下記のようなことが言われる。

☆「結婚式の前に、決してドレスとともにヴェールを試着すべきではない。」<sup>13)</sup>

☆「教会に向かって家を出るときまでに、完全な花嫁姿で鏡を見るのは縁起が悪い」と言われる。もし花嫁がどうしても衣装全部を試着してみたいという場合には、全身が映る鏡には姿を映さないほうがよいとされる。それでもいたしかたなく鏡に全身が映る場合、その一つの解決策は、例えば、ドレスを試着しても靴を片方履くだけにするとか、手袋を片方だけはめることにとどめるとか、付属品を全部身に着けてしまわないことで

ある<sup>14)</sup>。

☆「花嫁支度をした後は、ヴェールは挙式中の必要時まで、決して上げてはならない」とされる。本来、ヴェール着用には二つの理由があるとされる。一つは、教会へ向かう途中で、花嫁をさらおうとするかも知れない悪霊たちの目から花嫁の美しさを覆い隠すためとされた。もう一つは、結婚という特殊な状況下にある花嫁が魔力を得て、周囲の人々に魔法をかけることがないように、彼女を人々から隔離するためとされた<sup>15)</sup>。現在では、悪霊からの保護とか、魔力ゆえの人々からの隔離という理由からではなく、花嫁の美しさを増すものとしてヴェールが着用されるようである。しかしながら、「うかつにヴェールは上げないもの」という考えの奥には、やはりかつての保護と隔離の意味が潜んでいると言えそうである。

☆「ストッキングとか靴の中にコインを入れておくと、幸せな結婚となる。」<sup>16)</sup>

☆「青いガーターを着け、しかも古い靴を履いた花嫁は幸運に恵まれる」と言われる。

☆「ブーケにはオレンジの白い花を含めるのがよい。」オレンジの花は、その香りのよさと花の多さから「子宝に恵まれる」ことを象徴する、と言われる<sup>17)</sup>。

## 2 花嫁花婿の心得

### (1) 花嫁の心得

☆「結婚生活において幸福が訪れるようにするため、花嫁は教会に出かける前に自分でネコに食べ物を与えなければならない。」ネコを飼っている家が多いせいであろうか、古くからの俗信である。なぜ「ネコに餌をやる」のかについては、前号（第5項）で述べた通り、挙式日の悪天候やその他の不運をもたらすとされる悪魔や魔女のご機嫌をとるため、その使い魔であるネコを喜ばせておく必要があるため、という理由が推測される。

☆「新婦は教会の祭壇で新郎と顔を合わせる前に、新郎に会ってはならない。」

☆「教会へ向かう途中、後ろを振り返って見てはならない。」

特に次の3つの事柄は、悲惨な結婚になるとの心配から大いに戒められる<sup>18)</sup>。

☆「教会へ向かう途中、葬列に出会わないようにすること。」

☆「教会へ向かう途中、喪服を着た女性に出会わないようにすること。」

☆「教会へ向かう途中、教会墓地等で、開いたままの墓穴を絶対に見ないこと。」

また、これらのこととは逆に、縁起がよいとされる事柄もある。

☆「教会へ向かう途中、煙突掃除夫（chimney sweep）に出会うと大変縁起がよい」とされる。この場合、煙突掃除夫は花嫁に祝福のキスをするのが許される。（なお、次号で触れることになるが、結婚式を済ませた新婚夫妻が教会を去るときに、前もって打ち合わせておいて、顔にすすを塗った煙突掃除夫に出会い、縁起よく祝福されるようにしばしば仕組まれるという習慣がある。）ところで、花嫁（また花婿も含めて）が煙突掃除夫

に出会うことがなぜめでたいとされるのかについては、言われることが共通しているようである——次の例は Peter Lorie の述べる理由である。

The origin lay within the fact that the sweep was a guardian of the hearth and the fire which were once the very center of domestic magic.<sup>19)</sup>

(その起源は、煙突掃除夫は、かつては家庭魔法のまさにその中心であった暖炉や炉の守護者であるという事実にあった。)

つまり、新婚者がこれから現実の生活をしていくとき、家庭の幸福の象徴である暖炉の火が明々とともることを願うわけだが、それを護ってくれるのが煙突掃除夫であるということから、この人との出会いは、今後の生活における幸福の保証を意味するのである。

☆「教会へ向かう途中、茸毛の馬や白馬と出会うのは縁起がよい。」白い乗り物は縁起がよいということであろう。今日、一部の社会で「婚礼用には白のタクシーを用いる」という気遣いは、この縁起担ぎの現代版と言えるであろう。

## (2) 花婿の心得

花婿の側にも、気をつけなければならない以下のようなことがある。

☆「花婿は挙式前に花嫁の衣装を見てはならない。また挙式前に、花嫁が衣装を身に着けた姿を見ることも縁起が悪い」<sup>20)</sup>とされる。

☆「花婿は挙式当日、式の前に花嫁に会ってはならない。」これに関して、Sir Walter Scott, *A Legend of Montrose* (1819) に次の箇所が見られる。

It had been settled that, according to the custom of the country, the bride and bridegroom should not again meet until they were before the altar.<sup>21)</sup>

(土地の習慣に従って、花嫁と花婿は祭壇の前に立つまでは、再び会ってはいけないということが決まりとなっていた。)

ここでの「再び会っては」は、「(式前日までに会って以後) 再び会っては」の意味である。つまり挙式日には、両者は祭壇で顔を合わせるまで会ってはならない、とされた。

ところで、花婿は挙式当日、式より前になぜ花嫁を見てはならないのであろうか。これにはいろいろな考え方があるようである。一つには、花嫁がどのような顔をしてどのような様子で現れるのかを想像しながら祭壇の前で待てば、盛装の花嫁が現れたときのその美しい姿に対する驚きと喜びが最大に高まり、生涯における晴れの儀式を感動的なものにすることができるからである、とよく言われる。しかしながら、この俗信での花婿の視点を花嫁の視点に変えて、「式より前に花婿に見られることは、花嫁にとって何かまずいことにつながるか」と考えてみると、違った見方ができるかもしれない。Tad Tuleja の記述

によると、もっと確かな歴史的な解釈では、それは、婚約した女性が一人前の女になるまでは、何者もその女性を見てはならないとした原始的な隔離儀礼の名残りとされる考え方があると言う。また、これに関して Arnold Vann Gennep の古典的な見解に触れ、結婚式は古い仕来たりから離脱する時期であり、過渡期であり、新しい仕来たりへの編入の時期でもあり、こうした時期は混乱や危険に満ちているため、一時の間花嫁を隔離しておくべきという解釈があると述べている。さらに Tuleja は、多くの社会では、やがて花嫁になる者は不浄と見做され、他の人々を汚すことがないように式の前の一時期隔離されることになる、という解釈があることを示し、やはりこれも編入の儀式が済むまでは何か間違い事が起きる心配があるとの不安を表しているのが明らかだ、と述べている<sup>22)</sup>。確かにこの習慣のいわれは推測の域を出ないが、今もって守られる傾向は強いようである。

その他の花婿の心得として、挙式中花婿が絶対に注意すべき次のことがある。

☆「式中に、花婿は結婚指輪を取り落としてはならない」とされる。結婚指輪を取り落とすことは、彼らの結婚生活の前途を真っ暗にしてしまう、と戒められる。

### 3 教会と挙式

まず大方の場合、教会で結婚式が挙げられる。ところで、教会の長い歴史の上では、結婚や結婚式に対する考え方の点で、教会がそれを認めない、あるいは認めたがらないという一面があった。それは多くの信仰において普通よく見られるように、異性との交わりは宗教上からは卑俗なこと——信仰上の修行には禁欲が要件——とされたからである。それが現実として示されたのが「キリスト教制度における最も古い結婚の形は、…閉じられた教会の戸の外で簡単な祝福を受けるものだった」<sup>23)</sup>という事実であろう。

以下に記すのは、教会と結婚式、及び挙式中の事柄に関する習慣や俗信である。

☆「洗礼を受けた教会で結婚式を挙げれば、特に花嫁にとっては幸福をもたらす」<sup>24)</sup>と言われる。

☆「花嫁が教会に入る直前に教会の鐘が時を告げると、婿さん選びがうまくいったことを示すが、教会に入った後で鐘が鳴り出すと不幸な結果になる」<sup>25)</sup>と一般に言われる。

☆「結婚式の最中に教会の鐘が時を告げるのは縁起が悪い」<sup>26)</sup>と広く言われる。

☆「結婚式挙行中に、赤ん坊の泣き声が聞こえるのは縁起がよい」とされる。「赤ん坊の泣き声」は結婚後の幸福の予兆とも言えるのであろう。ノーフォーク州辺りでは、このことは「肝心なこと」とされるようである<sup>27)</sup>。

### 4 式参列者 (wedding attendants)

例えば、典型的な米国の結婚式では、新郎新婦の他に、花婿添人 (best man) ——花婿付添人たち ((bride)groomsmen) のうちの中心的人物——そして花嫁介添役 (maid or matron of honour) 及び花嫁付添人たち (bridesmaids) が参列者として加わる。彼らの参列

の意味は、当日の式において、新郎新婦の生涯における重大かつ困難な時に精神的物質的両面で手助けをすることである、とされるのが一般的な考え方である。

この慣習についての説明はいろいろあるようであるが、Tad Tuleja も挙げているが、一つは、参列者は、原始社会で他部落から女性を略奪して妻とした略奪結婚の時代以来、張り合う戦士 (rival war parties) の現代版だという考え方である。ただ、戦士というだけに、花嫁の守護者たち (bride defenders) もかつては男性であったとされるようであるが、花嫁の世話をする便宜上からであろうか、それが時の経過の中で女性に変わってしまっているのである。二つ目は参列者を新郎新婦の証人役だとする説明である。これは当事者二人の性格や彼らの結婚の適切さを証言する、という役目を持つものである。三つ目は参列者を花嫁花婿の身代わり (substitutes for the bride and groom) と見做す説明である。婚礼の儀式には悪魔が邪魔をする心配があるため、彼らと同一または類似の服装をした参列者がいれば悪魔がいたずらをするにも困惑するであろう、というものである<sup>28)</sup>。

婚礼の儀式で新郎新婦の実際上の手助け役をするこれらの参列者が、最初どういう理由から存在するようになったのか、上記三つの説明のうちから一つを選ぶのは難しく思われる。ただ、「新郎新婦と同様の服装をした」参列者という点から言えば、「悪魔の邪魔から逃れるための身代わり」という説明には、共感を覚えずにはいられない一面がある。

ところで、花婿付添人にとって、絶対に注意しなければならないことがある。

☆「式中に、花婿付添人は結婚指輪を絶対に取り落としてはならない」とされる。結婚指輪を取り落とすことは、新夫妻の結婚生活を台なしにしてしまう、と戒められる。

なお、参列者の仲間に加えてもよいと思われる者に花撒き娘 (flower girls) がいる。彼女たちは花を持って登場し、それを撒き散らすことによって儀式的緊張を解す役目を果たしているように思われる。ところで、結婚式で用いられる花については、それはただ美しく華やかな賑いを醸し出すためばかりではなく、象徴的な意味合いを持つものとされる。花は処女性の「もろさ」と「結実、誕生 (子宝)」を象徴すると言われる<sup>29)</sup>。

## 5 花嫁の引き渡し

教会での結婚式では、慣習として、花嫁の父親が娘を祭壇の前まで導き、そこで待っている花婿に娘を引き渡す。こうして娘は親の手から離れ、すべてが花婿に委ねられることになる。ところでこの花嫁の引き渡しについては、一部の社会では結婚形態の歴史上で、親が娘を夫たる男性に売却するという売買結婚の風習があったが、その名残りなのではないかという見方があるようである。このことはまた、親が娘を売却するというばかりではなく、「夫が妻を他の男性に転売する」<sup>30)</sup>ということにも波及するようである。これは女性を商品や所有物として見做すことであり、現代では女性の人権無視の重大問題となろう。

花嫁の引き渡しについてここで考えられる説明は、親は娘を売却するという考え方ではなく、親の立場から言えば、娘は神からの授かりものであるが故に、物質的金銭的報酬な

しで、その人生の伴侶たる者に授けられるのが本来の考え方と言えるであろう<sup>31)</sup>。こう考えれば、結婚式での花嫁の引き渡しは、女性の人権尊重をも大いに満たすことになると言える。

## 6 花嫁の涙

花嫁が結婚式当日に泣くことについては、吉凶両様の考え方があるようである。

☆「花嫁が結婚式当日に泣くのは大変不吉である」とされることがある。根底的には、「めでたい結婚式の日に涙は禁物」という考え方に基づくものであろう。しかしながら、花嫁の涙は、その結婚に気が進まない等の理由からの場合もあるかもしれないし、また場合によれば、何らかの感動を覚えての嬉しい涙、ということもあり得るであろう。

この逆もある。古来イギリスには、結婚式のときに花嫁が存分に泣かなければ将来の結婚生活が不幸になる、という考え方がある。次は‘weeping’と呼ばれるものである。

☆「花嫁は結婚式当日に泣かなければならない、むしろ泣く必要がある」とされる。この「泣く必要」については、特に魔女（witch）に関連する事柄が持ち出される。古来「魔女は涙を左眼から3滴しか流さない」とされ、そこで花嫁は夫に対して「サタン（satan）に誓いを立てておらず、魔女ではない」という証しを立てるために「泣いて見せる」つまり「泣く必要がある」わけである<sup>32)</sup>。

花嫁の涙の両様の解釈については全く矛盾する点があるが、肝心なことは、どういう理由で涙を流すのかということ、つまり「涙の内容」によるであろう。

## 7 結婚指輪（wedding ring）

よく言われるように、始まりも終わりもない輪である指輪は「永遠、結合、完全」の三つの概念を表すものである<sup>33)</sup>が、特に結婚指輪は男女が共に生涯の愛を誓い合ったその表象であるため、いずれの文化においても大切に扱われるべきものとされる。

☆「結婚指輪を落としたりなくすことは、不幸を招く」と一般的に言われる。これは特に婦人の間で言われることであるが、この「不幸を招く」の内容には、夫と離婚する、あるいは夫が思わぬ事故に遭ったり病気になる、あるいは死亡する等が含まれるので、結婚指輪を落としたりなくしたりすることは、妻にとってはまさに重大な事柄に結びつく恐れがあるというわけである。

ところで結婚指輪を入れる指は、左手の薬指とされるのが一般的であるが、なぜこの指に限定されるのかについては古来さまざまな説がある。これに関して Ebenezer C. Brewer は、*Brewer's Dictionary of Phrase and Fable* で次のような説を紹介している。

Wedding Finger: The fourth finger of the left hand. Macrobius says the thumb is too busy to



be set apart, the forefinger and little finger are only half protected, the middle finger is called *medicus*, and is too opprobrious for the purpose of honour, so the only finger left is the *pronubus*. Aulus Gellius tells us that Appianus asserts in his Egyptian books that a very delicate nerve runs from the fourth finger of the left hand to the heart, on which account this finger is used for the marriage ring.

[... by the received opinion of the learned. . . in ripping up and anatomising men's bodies, there is a vein of blood, called *vena amoris*, which passeth from that finger to the heart.

Henry Swinburne, *Treaties of Spousals* (1680).<sup>34)</sup>

(結婚の指：左手の第四指〔親指 (thumb) から数えて第四番目にあたる指、つまり薬指 (medical finger)〕。マクロビウスの言うところでは、親指はよく使うので他の用途には使えない。人差し指と小指は半分しか保護されていない。中指は医療の指メデイカスと呼ばれ、晴れがましい目的には礼を失する。そうすると、残された唯一の指が結婚の指プロノブスとなる、ということである。アウルス・ゲリウスによると、アッピアノスは彼のエジプト書の中で、左手の第四指から心臓にかけて極めて繊細な神経が走っていて、その理由でこの指が結婚指輪を入れるのに使われると断言しているそうである。)

(…学者の認める見解では…人間の身体を解剖すると、その指〔第四指〕から心臓に通じている、ヴェナ・アモリスと呼ばれる (静脈) 血管がある。

Henry Swinburne, *Treaties of Spousals* (1680))

Brewer は同記述のところで、結婚指輪を指に入れるときの方法について言及している——ローマ・カトリック教会では、親指と隣の二本の指は三位一体説 (Trinity) を表す。故に花婿は「父の名において」と言って花嫁の親指に触れ、「御子の名において」と言って人差し指に触れ、「聖霊の名において」と言って長い中指に触れる。「アーメン」と言う言葉とともに指輪を第四の指 (薬指) に置き、そこに残す。Brewer はさらに続けて次のことも記述している——ある国では結婚指輪を右手に入れるが、これは16世紀の終わりまでイングランドで一般に行われた習慣であり、また、ローマ・カトリックの間では、もっと後まで行われた習慣であった。

Brewer は同箇所ですらに続けて——ヘレフォード、ヨーク、ソールズベリーの祈祷書では、指輪はまず親指、次に入差し指、それから長い指 (中指)、そして最後に指輪の指に置かれるように指示されており、*quia in illo digito est quaedam vena procedens usque ad cor*. (なぜなら、その指 (薬指) には心臓まで進んでいくある種の血管があるからである。) と記されていると述べている。

しかしながら、結婚指輪が左手薬指に入れられたのは、左手の薬指が愛情の表象とされる心臓に結びついていたと考えられた「神経説」や「血管説」は、今日では実は正しくな

いことが判明している。これに対して、E. & M. A. Radfordによる *British Appolo* に掲載された次の記事の紹介は興味深い。

We have stated. . . that there is neither vein nor nerve so running. The explanation of the use of that finger [the third finger] is fairly obvious, and was put forward in the *British Appolo* in 1788—it is the safest finger of the two hands. Why? Because it has the peculiar advantage for a ring that it cannot be extended full out except in company with another finger, whereas every other finger can be stretched independently. A ring cannot easily fall off a crooked finger.<sup>35)</sup>

(我々は既に述べた…血管も神経もそのように走ってなどいないことを。その指〔第三指〕を使う説明は相当に明瞭であり、1788年に『ブリテイシュ・アポロ』に掲載された。——それは両手のうちで最も安全な指である。なぜか？その理由は、それは別の指といっしょに以外では、いっばいに伸ばされ得ないという、指輪のための特別な利点を持っているからである。それに反して、他のすべての指はそれだけで伸ばされ得る。指輪は曲がった指からは容易には抜け落ちるはずがないからである。)

なお、ここでの第三指とは親指 (thumb) を除く四つの指 (fingers) の三番目、つまり薬指 (medical finger) のことである。薬指は単独では伸ばしにくい点から、大切な結婚指輪を入れておくには最適の指だというわけである。終わりに今一つ、その薬指が左手とされるのはなぜなのであろうか。かつてはそれは右手につけられたこともあるとされるが、恐らくは、一般に左手は右手ほどには使われないため、大切な指輪を傷めないで済むということが理由の一つではないかと思われる。

[次号「祝福の古靴投げ、披露宴、花嫁の敷居越え」等に続く。]

## Acknowledgements

貴重なご教示をいただいた Amy R. Chavez 女史に感謝申し上げます。

## Notes

- 1) *Folklore, Myths and Legends of Britain*, ed. Reader's Digest Assn, 2nd ed. (London: Reader's Digest Assn, 1997) 58 (R)–59 (L).
- 2) "Wedding dress," *Cassell Dictionary of Superstitions*, ed. David Pickering (London: Cassell, 1995) 283 (L).
- 3) "Wedding dress," Pickering, 283 (R).
- 4) "Wedding dress," Pickering, 283 (R).
- 5) Tad Tuleja, *Curious Customs* (New York: Harmony Books, 1987) 56–57.
- 6) "Colours, 'Blue'," *An Illustrated Encyclopaedia of Traditional Symbols*, ed. J. C. Cooper (1978; London: Thames and Hudson, rpt. 1993) 40 (L); 'chastity.'
- 7) Geoffrey Chaucer, "The Squires Tale," 643–45, *The Canterbury Tales, Chaucer Complete Works*, ed. Walter W.

- Skeat (1912 ; London : Oxford UP, 1965) 636.
- 8) "Colours, 'White'," Cooper, 41 (L) ; 'innocence,' 'purity'
  - 9) Oliver Goldsmith, *The Good Natur'd Man*, IV, *Collected Works of Oliver Goldsmith*, ed. Arthur Friedman, 5 vols. (Oxford : Clarendon, 1966) vol. 5, 60.
  - 10) "Weddings," *The Customs and Ceremonies of Britain*, ed. Charles Kightly (London : Thames and Hudson, 1986) 229 (R).
  - 11) "Wedding dress," Pickering, 283 (R).
  - 12) "Wedding dress," Pickering, 283 (R).
  - 13) Reader's Digest Assn, 59 (L).
  - 14) "Wedding dress," Pickering, 283 (R).
  - 15) Reader's Digest Assn, 58 (R).
  - 16) "Wedding dress," Pickering, 283 (R).
  - 17) "Orange," *An Encyclopedia of Flora and Fauna in English and American Literature*, ed. Peter Milward (Lewiston <NY> : Edwin Mellen, 1992) Part 1, 52 ; 'symbolic of fruitfulness in children'
  - 18) "Weddings," Kightly, 229 (R).
  - 19) Peter Lorie, *Superstitions* (New York : Simon & Shuster, 1992) 220.
  - 20) "Wedding dress," Pickering, 283 (R).
  - 21) Sir Walter Scott, *A Legend of Montrose*, X X III ; *Waverley Novels*, Centenary ed. vol. VI, *A Legend of Montrose and The Black Dwarf* (Edinburgh : Adam & Charles Black, 1871) 217.
  - 22) Tuleja, 52-53.
  - 23) "Marriage," *The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets*, ed. Barbara G. Walker (San Francisco : Harper, 1983) 590.
  - 24) "Marriage service in baptismal church," *A Dictionary of Superstitions*, ed. Iona Opie & Moira Tatem (1989 ; Oxford : Oxford UP, 1990) 240 (L).
  - 25) "Clock strikes during marriage ceremony," <1910> *Folklore* (226), Opie & Tatem, 86 (L).
  - 26) "Bells," E. & M. A. Radford *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. & rev. Christina Hole (1948 ; London : Hutchinson, rev. 1961) 43.
  - 27) "Marriage service, baby cries during," Opie & Tatem, 239 (R).
  - 28) Tuleja, 53-54.
  - 29) "Flower," *Dictionary of Mythology, Folklore and Symbols*, ed. Gertrude Jobes, 3 vols. (New York : Scarecrow, 1962), vol. 1, 585 (L) ; 'frailty' ; 'fruition,' 'birth'
  - 30) Tuleja, 55 ; ... T. S. Knowlson, writing of England in the 1880s, reported "at least a dozen cases" of wife-selling—one in which the woman was handed over for "eighteen pence and a glass of beer."
  - 31) Tuleja, 55.
  - 32) "Weeping," *Brewer's Dictionary of Phrase and Fable*, rev. Ivor H. Evans, Centenary ed. 6th imp. (1870, ed. Ebenezer Cobham Brewer ; London : Cassell, 1978) 1146 (R).
  - 33) "Ring," Pickering, 219 (R).
  - 34) "Wedding finger," Evans, 1145 (R) -46 (L).
  - 35) "Wedding ring," *Encyclopaedia of Superstitions*, ed. E. & M. A. Radford (New York : Philosophical Lib., 1949 ; New York : Greenwood, 1969) 254 (R) -55 (L).

Speculation Concerning Superstitions in the Cultural  
Background of the English & the Americans—(8)  
III LOVE AND MARRIAGE Part 3 : On the Customs and  
Superstitions of Bridal Costume, Bride and  
Bridegroom's Knowledge and Wedding Ceremony

Kunihiro FUJITAKA

*Faculty of the College of Liberal Arts and Science,*

*Kurashiki University of Science and the Arts,*

*2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan*

(Received September 30, 1999)

After they have been engaged, the bride and bridegroom in the near future have to prepare a variety of things, being helped by the people surrounding them, for their wedding which is drawing near. The bride-to-be and her family in particular should pay a special attention to her bridal costume ; wedding dress, veil, gloves, shoes, bouquet, etc. From ancient times, a bride has been satisfying the four traditional regulations about bridal costume : she must wear 'something old,' 'something new,' 'something borrowed,' and 'something blue' on the very ceremonial day. It has been explained that fulfillment of the customary rules enables her to be lucky and happy in her future life, the 'old' being connected with the past, the 'new' with the future, the 'borrowed' with the present, and the 'blue' with the chastity.

When the bride and bridegroom have their own wedding day, they should behave according to certain customs as the new couple-to-be, and put several important matters into practice. The examples of the customs include bride's timely arrival at church just after the church bell has rung, and bridegroom's never seeing his bride before their wedding ceremony. It is usual on the day of marriage that they should experience several things extremely superstitious which have been handed down for many centuries. Most bridal pairs try to fulfill the superstitious customs, because they do hope to ensure their future good luck and happiness through practicing the superstitions.

In this paper, we will list a variety of customs and superstitions of bridal costume, bride and bridegroom's knowledge, wedding ceremony, etc., and speculate on the origins, reasons, effects, etc., exemplifying the practical usages from English literary works. We will be pleased to a great extent if this speculation helps us to have a better understanding of the ways of thinking and behaving of English-speaking people.